

## 久慈川沿いの竹林

市内の久慈川両岸に、途切れながらも延々と連なる竹林は、私たちにとって、ありふれた当たり前の景色です。この竹林、実はご先祖様たちが代々整備してきた、水害の被害を減らす装置であり、全国的に見ても貴重な景観であることをご存知ですか？

### ◆他人事ではない災害 洪水

記録的な大雨によって鬼怒川の堤防が決壊し、常総市の広い範囲が洪水によって被災したのは、つい1カ月あまり前のこと。今回は大過なく済んだ本市ですが、雨雲がほんの少し東を通過していたら、大きな被害をこうむっていたかもしれません。

事実、昔から那珂川や久慈川の氾濫は、大きな被害をもたらし、久慈川流域だけを見ても、記録の残る江戸時代から昭和までに、14回もの大洪水に見舞われており、川に近い低地の田畑が浸水する程度の増水は、久慈川河口の改良工事が完了する昭和50年頃まで、頻繁に起こっていたといえます。

### ◆竹の植栽

文政3年(1820)、小倉村の庄屋となった沼田伝蔵は、度々の久慈川の氾濫による耕地の荒廃に心を痛め、築堤とともに川岸に真竹の植栽を進めました。

郡司篤則撰文になる「沼田伝蔵翁之事績」(大正2年)によると、「(前略)久慈川は毎年氾濫し、沿岸の田畑は砂礫に埋まって荒地となってしまうものが多く、家々は苦しみ、民は病んだ。翁は大いに憂えて、堤を築き、竹や柳を植えた。年を経ずして堤は固まり、竹は鬱蒼とした林となった。竹林は水害を免れるだけでなく、竹材として売却することで村に利益をもたらした。(後略)」(原漢文 意訳)とあります。

また辰ノ口村の木村弥次衛門も、文久2年(1862)に洪水の跡を見回った折、川岸に竹根が残っていることに気づき、竹を植えて護岸とすることを始めた、と伝えられています。

もともと、久慈川の岸には自然の竹林もあったのでしょう。水戸藩によって設けられた辰ノ口・岩崎江堰の保護と、大量に使用する蛇籠の材料確保のため竹は重要であり、藩は久慈川の竹林を「御立山(おたてやま)」(藩有林)として保護してきました。

明治になって、御立山だった竹林は村(現在の大字)に払い下げられて引き続き管理されるとともに、小倉や辰ノ口で始まったとされる人為的な川岸への植栽は、対岸を含む周囲の村々にも広がって、現在の見事な竹林が生まれたと考えられます。昭和20年代の世喜村(現 富岡・小倉・塩原・辰ノ口・照山・小貫)の竹林の総延長は8.3km、幅は広いところで120mもあったそうです。

### ◆竹林の機能と恵み

防災のために竹等を植えることは全国的に行われており、水害防備林と呼ばれています。その働きは、増水して荒れ狂う水の勢力を減らすとともに、濁流に巻き込まれた草木や石などを濾し取り、根が川岸や堤防の侵食・決壊を防ぐ役割を果たすことで川の流路を固定する、というものです。久慈川流域の竹林の多くも、大正から昭和にかけて水害防備林に指定されました。

竹林は、堤防のように水をさえぎる壁ではなく、水勢をそぐフィルターであり、たとえ浸水しても、沿岸の家屋や耕土の流出、岩石の流入を最小限に抑え、遊水地化することで河川全体の洪水を調節し、下流域の被害を軽減、冠水した田畑に肥沃な土を置いていくという優れた機能があります。

その上、竹は売却することで地域に少なからぬ利益をもたらしました。竹幹に、生えた年の印をつけ4年生の竹を出荷することで竹林を間伐・管理し、良林を維持していたといえます。

余談ながら、大正天皇と昭和天皇の大葬の際、斎場に結われた見事な竹垣の材は、すべて久慈川の竹林から伐り出されたものでした。

しかし、安価な竹製品の輸入やプラスチック製品への転換によって竹の需要は激減し、昭和末年以降、売却はほとんど行われなくなり、竹林の荒廃とともに、水害防備林としての機能低下も進んでいます。



▲辰ノ口親水公園と竹林

### ◆辰ノ口親水公園の整備

堤防の整備にともない、もはや無用とされた全国の水害防備林は次々と姿を消しています。しかし近年、堤防のみで河川を抑え込む手法に疑問が投げかけられ、水害防備林の有効性が説かれるようになってきました。

年号が平成に変わる頃、建設省関東地方建設局常陸工事事務所長に着任したH氏は、久慈川沿いに続くみごとな竹林を見て驚き、公園としての整備を当時の大宮町長に強く勧めたそうです。これが辰ノ口親水公園整備のきっかけとなりました。

私たちには、現在も私たちを守り、美しい景観として残っている久慈川沿いの竹林の価値を再評価し、後世に伝える努力が求められています。

歴史民俗資料館大宮館 ☎52-1450